

2. 1936年バルセロナ人民オリンピックアード をめぐる歴史像 - 報告要旨 -

上野 卓郎

執筆予定の私の論文構成を紹介することでテーマの全体像を示すこと、そして、改めてテーマの意味を問い直すために、先行文献の訳出・コメントにウェイトを置いた報告をすること、これが秋合宿での報告の主旨であった。

このノートでは、私の論文構成の紹介は省き、先行文献の訳出・コメントに限定することとする。文献はプジャードス・X / サンタカナ・C「バルセロナ人民競技大会の神話」(Pujadas, Xavier/Santacana, Carles, *Le Mythe des Jeux populaires de Barcelone*. in: Arnaud, P.(dir.), *Les origines du sport ouvrier en Europe*. Editions L'Harmattan/Paris, 1994, pp.267-277.)である。

プジャードス / サンタカナ論文は次のようになっている。(1) [はじめに]、(2) カタロニアの人民スポーツ運動、(3) 国際スポーツのコンテクスト、(4) 人民オリンピックアード：起源と政治的反応、(5) 人民オリンピックアード [プログラム]、(6) 人民オリンピックアードの悲劇的結末。この構成に従って論じる。

(1) 「30年代のカタロニアのスポーツの状況と国際スポーツのコンテクストを知らずに1936年の[人民]オリンピックアード・プロジェクトを理解することは不可能」というのがバルセロナ大学歴史学部の著者たち(プジャードス / サンタカナ)の史論テーマである。スペイン内戦勃発による開会式不発の日(7月19日)に「神話」が生まれ、「スポーツによる平和と友愛の祭典は塹壕のなかで死に絶えた」ことがその「伝説、神話を増長するのに貢献した」という。

半世紀以上の経過の中での「事実(とりわけ競

技大会組織化のプロセスとカタロニアの人民スポーツの根本的特徴に関わるもの)の歪曲」の要因として、以下の4点が挙げられる。a) 内乱・革命秩序構築後の組織委員会メンバーの口ぶりの変化(「プロレタリアートの競技大会」「労働者のオリンピックアード」として人民的・反ファシズム・スポーツの示威集会と呼んでいたものを「違った風に話すようになった」)。b) 右派政治勢力(大雑把には保守主義者、地域主義者、君主制擁護者、反共和制主義者)による論法(「コミュニスト」、「ボルシェヴィキスト」、「ユダヤ人」主導のものとしての非難・敵意)の「フランコ独裁期の体制資料編纂の公式言説」化(フランコ主義の40年間スペインでは「第2インターのコミュニスト^(*)のイニシアティブ」と主張)。c) ヨーロッパの資料編纂での労働者オリンピックアード史との関連の研究の表面性(スペイン・スポーツの組織化・発展状況を無視した比較による「混乱」、「事実の単純化」、「変形」)。そこから「全く新しい歴史解釈」の招来。d) 「アルヒーフと公式の記録文書の絶滅と結びつくスペイン・スポーツ史の戦争中の発展の脆弱さ」(「当時このテーマに関する調査もなかった」)。

b)とd)については、論点として首肯し得るし、その内容を把握しなければならないと考える。そして、その内容の展開が彼らの論文の説得力となるものと期待される論点提起であろう。だが、a)については、人民オリンピックアードの思想の担い手に「事実歪曲」の責任を負わせるという重大な論点提起であり、俄かには首肯し難い。組織委員会メンバーが「違った風に話すようになった」内乱・革命秩序構築後の言説をこの論文から具体的に掴み取ることができないからである。d)については、一般的には間違いではない(労働者オリ

ピアードの歴史に組み込んだ年表や記述が多いという意味で)が、その事例として不備だらけのリオーダンの一論文 (Riordan, J., The worker's olympics. in: Five ring circus, Money, power and politics at the Olympics games, London, 1984, pp.106-107) を「単純化の一例」(第3回労働者オリンピックとしてみたこと)として挙げているのは当を得ていないと思われる。リオーダンの記述は余りにもはっきりとした間違いだからである。それよりも問題だと思われるのは、著者たちの視野には体制転換前のチェコや東独のスポーツ史家の先行文献が「ヨーロッパの資料編纂」の範疇に入らないことである。さらに言えば、スポーツインターナショナル史研究との関連を忌避する歴史像構成の論理を打ち出しているのではないかとさえ疑われるが、この点はさしあたり保留する。

(2) 20年代末から30年代前半にかけて設立され、36年にカタロニア人民スポーツ委員会 (C C E P) に加入した団体の三つのカテゴリー a) アテネオ、地区図書館などの文化・レジャー団体、b) 衛生学者や自然回帰主義者小グループと結びついた底辺のスポーツ団体、c) 中産階級を集めた商店や小工場労働者のリベラルな組合 C A D C I などの労働者センターのスポーツ協会、政党、労働者協会) については、もう少し詳しい説明が欲しいところだが、これはカタロニアの人民スポーツの組織的特徴を理解する上で基礎的な知識として受け取るべきだろう。問題は「両大戦間の特有のコンテクストと人民戦線がカタロニアの人民スポーツ運動にも同様に影響を及ぼした。国際紛争と全体主義レジュームの脅威が人民スポーツ諸協会のメンバー間の絆を固めることに寄与した」というところである。著者たちの全体主義論的見地と、人民戦線への消極的評価がこの論証のさいに窺われるのである。「カタロニアの労働者スポーツマンは国際労働者スポーツとはいかなる結びつきも持っておらず、友愛・連帯・礼儀正しさという労働者文化固有の価値の回りに組織されていた」の対

して、「ヨーロッパでは人民戦線の言説(つまり反ファシズム)を広めることを引き受けていた多くのプロレタリア団体にスポーツがすでに根づいていた」としてカタロニアとヨーロッパの差異を示し、次のように断言する。「カタロニアのスポーツのポジションは、戦闘的活動家の創出、ブルジョアスポーツのオルタナティブスポーツの創出、ソビエトのモデルを模倣したスポーツドクトリンの捻出という三原則に基づく赤色スポーツインターナショナル (R S I) の指導者たちの言説よりも、かつてチェコスロヴァキアでティルシュのソコルで守られたものに近かった。」このティルシュのソコルとの近接説は全くの新知識だが、その実証は不十分である(注記で1932年バルセロナで出版された「身体文化による民族解放運動を強調するソコルを擁護する」Serchの本を文献表記なしで挙げているだけ)。また、R S I の「三原則」なるものを R S I 資料からではなく、1980年パリのエーレンベルク「赤色スポーツに関するノート」から示したことは、大いに不満である。典拠資料の不備と同時にエーレンベルクそのものも R S I 研究史において知られていないという二重の意味で。

ただし、「C C E P は人民の根に基づき、人民衛生とスポーツに結びつく純粋に文化的社会的な目標に向かう運動のセンターになることを望む」という C C E P の自己定義(36年5月)については、『国際スポーツ評論』36年巻の C C E P 代表談話記事での定義とも重なり、検証し得るといことは言っておかねばならない。

(3) 「二つの要因がバルセロナ人民競技大会の組織化の過程を説明し得る。一方は労働者オリンピックと、他方はベルリン・オリンピック大会ボイコット運動である。決定的なエレメントは国際スポーツである。」著者たちの史論テーゼの「国際スポーツのコンテクスト」がここで展開されると期待される。しかし、「二つの労働者スポーツインターナショナル (S A S I と R S I) のいずれによっても組織されなかったという単純な理由から、

労働者オリンピックの連続には刻み込まれなかった」として、労働者オリンピック史との非連続が強調される。そのさい、S A S I主催のフランクフルト（1925年）、ウィーン（1931年）、アントワープ（1937年）に、チェコ組織主催のプラハ（1921年）とR S I主催でスパルタキアード（労働者オリンピックに対抗）のモスクワ（1928年）も加えられているのは不正確である。アントワープ（1937年）に「スペインの内乱と革命の時期にカタロニアとスペインの人民スポーツの代表の参加も伴った」と付記しているのに、この連関については論じられていない。この連関こそ歴史像にとって重要なのに。

もう一つの要因、ベルリン・オリンピック大会ボイコット運動について。ここの論旨の読み取りは相当困難である。「スペインでは反ファシズム・平和主義のC C E Pがベルリン大会の一か月前にバルセロナ人民オリンピックを組織するが、このイニシアティブはもしそれが反ファシズム的・人民的特色を明確にするだけならベルリン・オリンピックとは直接には何の関係もないものだったろう。しかし、その方向づけはベルリン大会のボイコットのコンテクストに位置するだけにより明確であったかもしれない。」この記述は一応首肯できる（一か月前よりもう少し前だが）。「ベルリン大会との関連においてしかバルセロナ競技大会は歴史的な重要性を持たない。これが、改良主義とブルジョアの政策と労働者組織の間の調和を奨励しつつバルセロナ競技大会を可能にした人民戦線の局面である。」この文章の後半が難解である。さらに、「この競技大会は労働者連盟とブルジョア連盟の競技者を対決させ、スポーツイベントに象徴的な性格をこうして与えねばならなかった。これがおそらくフランスとスペインの人民戦線が単なる形式的同意を大きく超えて支持した理由である」という。つまり、労働者とブルジョアの連盟が調和したスポーツイベントの象徴性の付与を人民戦線の局面が必然化し、組織化を可能にしたということか。なお釈然としないが、先に進もう。

（４）ここで初めて著者たちは人民オリンピックの「固有の意義」を定義する。「赤色スポーツインターナショナルにもI O Cにも従わず、非マルクス主義左翼のスポーツ・文化団体の広範な組織網を拠り所とする30年代カタロニア民衆主義（populisme）のイデオロギーの表現」。そして「人民競技大会にそのアイデンティティと特異性を与えるのに寄与した」E R C [カタロニア左翼共和党、通称エスケーラ]に論及する。これは本論文の白眉と言ってもいい。だが、あるいはそれ故にこの部分の記述は短過ぎる。E R Cは「左翼リベラル、社会主義的傾向のグループ、急進民主主義者、サンディカリスト、非マルクス主義左翼の代表、カタロニア地域主義者」などの諸傾向を包含し、「保守主義勢力と社会主義・共産主義者の進歩主義勢力に分かれて」いて「ヨーロッパにこれに相当するものはないと思われる」「独創的な政治勢力」だが、その「イデオロギーは、拡散した仕方ではあるが、人民スポーツの擁護者を含む数多くのカタロニア人に共有されていた。」しかし、「人民オリンピックの理念がE R Cによって導かれていたということではない。それはカタロニアの人民スポーツ運動から生じ、E R Cのメンバーによく受け入れられたのである。」「人民競技大会は、もっぱらI O Cに拘束されたアマチュアに取っておかれるものでも、赤色スポーツを代表するものでもなく、初めてオルタナティブな大会として現れた。」

これまでの文献で不明だった人民オリンピック組織委員会（C O O P）の会長・副会長の経歴・肩書きが、ここで明記されているが、事務局のアンドレス・マルチンの名前が著者たちのカタロニア語単行本（L'Altra Olimpiada Barcelona '36. Esport, societat i politica a Catalunya (1900-1936). Llibres de l'Index/Barcelona, 1990）と同様、出てこない（同時代資料では明確）のは不可解である。

（５）人民オリンピックの代表団とプログラム

の独創性の分析もこの論文の白眉であろう。23の「代表団の数は構成国の数には決して対応していない。それはオリンピズムに新しい発展のモデルを導入するものである。」どういうことか。「構成国の代表の代表団のなかから政治的認知を求めている民族を受け入れるという選択は、人民の自由を認めるカタロニア人の意志を表している。バスク、アルジェリア、パレスチナのような政府を持たない民族の参加がその証しである。人民オリンピックは、オリンピズムが国際的正統性を求める政治的認知の一手段になる将来を先取りしたのである。」すなわち、ナショナル・アイデンティティの問題の解決モデルとされる。

次に、「スポーツの促進と普及のために働き、金儲け主義に対抗する」というスローガンの下、競技プログラムが三部分に構成された（エリートのための競技、中間の都市のチーム、アマチュアクラブのチーム）が、「スポーツ・フォー・オールを促進する意志と、エリートのスポーツと底辺のスポーツを接近させる意志を実際に表現する」目的であったこと、それに「女性が参加することが加わる」ことが注目される。この指摘は妥当であるが、人民オリンピックの理念との関連でもっと立ち入った記述が必要と思う。

最後に、「民族グループ（スコットランド、スイス、モロッコ、オランダ、フランス、オーストリア、アメリカ）の参加をもって、人民の間の平和と友愛の理想の下にスポーツと文化の結びつきを導入した。さらに、絵画、彫刻、写真の展覧会とデッサンのコンクールが、スポーツの金儲け主義と軍国主義化との対照をなすことで人民スポーツの優位と純粋さを高めることに貢献した。文学コンクールが全てを仕上げ、有名なカタロニア人作家ホセ・M・デ・サガッラがオリンピック賛歌を書いていた。」このサガッラについての記述は新知識である。人民オリンピック賛歌の作曲は、ベルリンのアルヒーフから発掘されたハンス・アイスラーによるもの（1995年にコピー入手）だが、その楽譜に付いた詩がサガッラのものだったのだ

ろうか。その確認の手がかりはまだ得ていない。

（6）内乱の間、「オリンピックを組織していたカタロニアのスポーツ勢力は、共和国軍の身体訓練に参加することでスポーツを戦争に役立てることを強いられ」、「戦争の間、CCEPの指導者たちは彼らの反ファシズム言説を体系化し、スペインの名のもとに1937年アントワープ第3回労働者オリンピックに参加し、国際労働者スポーツ組織に引き入れられた。」ここで、著者たちの言う人民オリンピック組織者の「口ぶりの変化」が（本来はなかった）国際労働者スポーツとのつながりの契機となったという見方が読み取れる。ただし、「戦争の終結〔フランコ側の勝利〕は彼らを亡命に導き、とりわけフランスでパリに亡命者委員会を設立することでカタロニアのオリンピックの炎を維持した」という記述は初見であり、パリ亡命者委員会についての資料も全く得られていない。「しかし、フランコ主義に対する彼らの闘争はほとんど反響がなく、成功からはさらに遠かった」という。